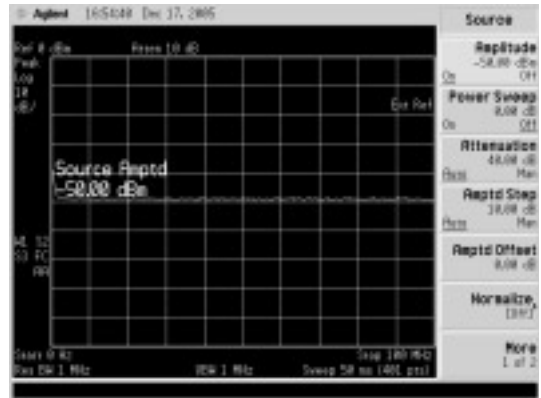
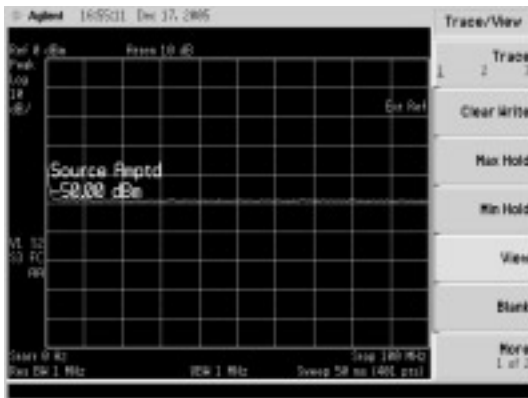


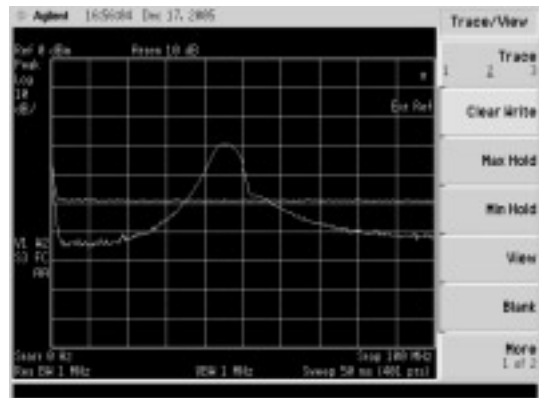
画面7.23 トラッキング・ジェネレータの出力を変更する (-50 dBm)



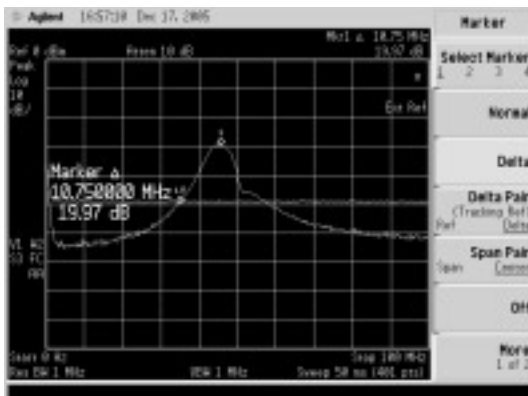
画面7.24 トラッキング・ジェネレータを有効にする



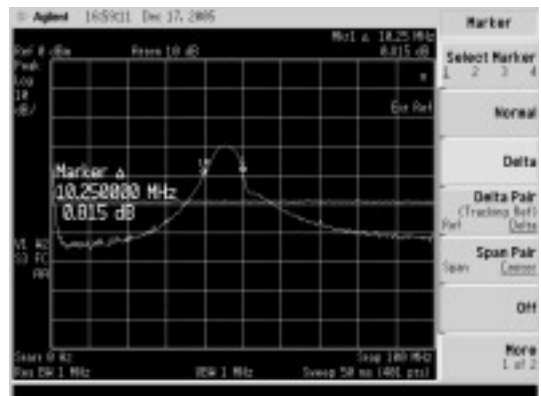
画面7.25 利得ゼロの状態を画面にホールドする



画面7.26 トレース2を有効にしショート・プラグを測定するアンプに変更する



画面7.27 デルタ・マーカを使用して最大利得を測定する



画面7.28 利得が10 dB以上の帯域幅を測定する

(画面7.24).

③トレースを設定する

測定結果を読み取りやすくするために、ショート・プラグを接続した状態を画面にホールドします。

[View/Trace] (☞3.1)- [View] (☞3.2) (画面7.25)。

測定結果を表示するためにTrace2を有効にしたのち、ショート・プラグをはずし、測定するアンプを接続します。

[View/Trace] (☞3.1)- [Trace] (☞3.2)で2にアンダ・バーが表示されます。

[View/Trace] (☞3.1)- [Clear Write] (☞3.3)でアンプの特性が画面7.26のように表示されます。

④デルタ・マーカを使用して、画面7.27、画面7.28のように利得や帯域を測定することができる

トラッキング・ジェネレータを使用せずに周波数特性を測定する

トラッキング・ジェネレータはたいへん便利な周辺機器ですが、対応するトラッキング・ジェネレータが存在しないスペクトラム・アナライザもあり、また普段は必要ないけれども、ときどき周波数特定が測定したい場合もあるかと思えます。

その場合、周波数可変の信号発生器を併用することで、簡略的に測定することが可能です。

このときに使用する信号源はSSG(標準信号発生器)などの周波数やレベルが正確で、細かく調整できるものが便利ですが、周波数が可変でき、信号レベルが -10 dBm ぐらいある発振器なら使用可能です。

測定方法は信号源とスペクトラム・アナライザとの間に被測定物を接続し、信号源の周波数をゆっくりと動かしていきます。

その際、スペクトラム・アナライザのMax Hold機能を使用して、信号をホールドすることで周波数特性が表示されます。例として中心周波数45 MHzのFM用フィルタの周波数特性を測定します。

機器のセットアップは、図7.11のように接続します。

①センタ周波数とスパン周波数を設定する

測定対象と周波数に合わせて測定範囲の周波数を設定します。スペクトラム・アナライザの設定手順を図7.12に示します。

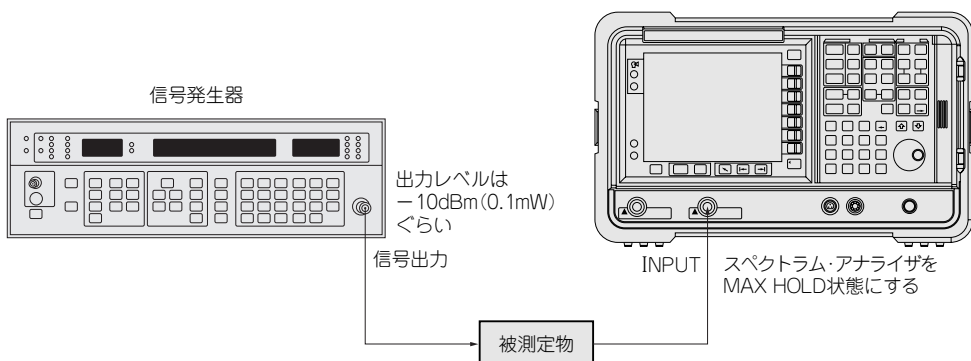


図7.11 トラッキング・ジェネレータを使用せずに周波数特性を測定する